

## プロローグ

二〇二〇（令和二）年一月、私は前著『あの時の野球とあの子たち』（大学教育出版刊）のあとがきにこう綴った。

最後まで諦めるわけにはいかないのが、知的障がいのある生徒たちの硬式野球部の設立だ。甲子園大会の予選に参加してみたい。

（中略）

あとは現実にはトライすることができなのか、または架空の話としていつか書くことになるのかである。若い頃はがむしやりに自分の夢を追い求めていたが、今は次に何が起こるのか、少し楽しみながら待てるようになってきた。

さて、どうなることやら…。

うーん。

今の学校（二〇二〇年）で硬式野球部を設立できるか？

あと少しで異動だしな…。

でも、楽しみながら待っていても、何も変わらないよなあ……。

時は流れ、その年の秋。

ん？

そうだ！

急に野球の神様が降臨したような、閃きだった。

どうせやるなら、全国展開のプロジェクト立ち上げ！

ネーミングは？

やっぱり、甲子園を入れないと。

目指せ？ 甲子園

行くぞ？ 甲子園

うーん…、ありきたりだな。

私の、知的障がいのある生徒たちの、保護者の、甲子園って、何だろう？

夢？

そうだ！ 夢！

甲子園夢プロジェクト！

これだ！

全国の知的障がいのある生徒たちに呼びかけよう。

硬式野球やろうぜ！

甲子園大会の予選に出場しようぜ！

二〇二一年三月六日 甲子園夢プロジェクト発足記者発表会の会見席中央に私、私の右隣には荻野忠寛さん、左隣には小笠原大騎さん。荻野さんは二〇〇七年〜二〇一四年までプロ野球千葉ロッテマリーンズの投手として大活躍した。引退後には私の社会人野球監督時代にチームの臨時コーチを務めてくれた。小笠原さんは、同じく私の社会人野球監督時代に捕手としてチームを支えてくれ、二〇二〇年には社会人野球の最高峰である都市対抗野球大会に補強選手として出場した。二人とも今回のプロジェクトへの協力依頼に二つ返事で快諾してもらえたのだ。

報道関係出席 十三社（事前取材含む）

おお、すごい！

「えー、只今から甲子園夢プロジェクト発足記者発表会をはじめさせていただきます」と私。  
立ち上がり、一礼する。

カシャ！カシャ！カシャ！

一斉に鳴るカメラのシャッター音とフラッシュ

(緊張…)

原稿を手元に置き、約一時間半気持ちを込めて、話し続けた。

(ちよつと、長すぎたかな)

最後に連絡先として私の携帯番号を掲載してもらうように伝えた。

すると、記者の方が手を挙げる。

「久保田先生、携帯番号を載せると、いたずら電話が掛かってくるかもしれませんが、大丈夫ですか」

「はい。大丈夫です。メールとかよりも、直接電話で話した方がお互いの気持ち伝わるのです。私は学校で保護者に連絡するときも対面または電話をするようにしています」

びしつと返答する。

(そう言われてしまうと、いたずら電話大丈夫なのか…。それよりも、こんなに大々的に記者発表会までして、一人も連絡が来なかったら、どうしようか。ちよつと、格好悪いよな)

その日の夜。私の携帯が鳴る。見ると見知らぬ番号が表示されていた。

「はい。久保田ですが」

「あー、はじめまして。私、愛知県の林と申します」

「はい」

「先程、主人から連絡がありました、主人がネットニュースで甲子園夢プロジェクトの記事を見つけて、そこに連絡先で久保田先生の携帯番号が書かれていたので、お電話しました」

(おっ、これは！)

「はい。お電話ありがとうございます。お子さんの件でしょうか」

「はい。息子の龍之介ですが、野球が大好きなんです。大の中日ドラゴンズファンで、ファンクラブにも入っています。龍之介は今、愛知県立の特別支援学校に通っているのですが、残念ながら野球部がなく、陸上部に所属しています。いつも本人は野球がやりたいと言っております。先程、甲子園夢プロジェクトのことを知り、龍之介もぜひ参加したいと、とても嬉しそうに言ってきたので、お電話しました」

「はい！ そうなんです。ありがとうございます！ 実は、林さんが参加希望者の一番目なんです。私も嬉しいですよ！」

「そうなんです。それで、三月二十七日の最初の練習会に参加したいのですが、どこでやる予定ですか」

「はい。今のところ都内の高校のグラウンドを借りる予定です。愛知からですと遠いですよね。すみません」

「いえ、大丈夫です。ぜひ参加させてください！」

「ありがとうございます！ 詳細はまた改めてご連絡させていただきます」

(やったー！)

それから「私は高校時代甲子園を目指して野球をやっていました。息子には知的障がいがあり、特別支援学校に通っていますが、野球部がありません。硬式野球は危険が伴うから部活動としてやらないというのが学校の見解です。息子は野球が大好きなので、やらせてあげる環境がないことにもどかしさがずっとありました」等の電話が連日私の携帯に入った。

参加生徒は十一名になった。

三月二十七日、東京都内の室内練習場で甲子園プロジェクト第一回練習会を迎えた。愛知県から参加の林龍之介君も元気な顔を見せている。

荻野さんが「今日は楽しんで。やりたいことをやろう」と声をかけ、練習開始。  
カーン。

室内練習場に硬球の打球音が響く。

「久保田先生、何か感慨深そうですが」

知り合いの記者が声をかけてきた。

「はい。やっと、特別支援学校の生徒たちが硬球を打つ音を聞くことができました。ここまで

長かったので、思わず涙が出そうになってしまいました」

「そうなんですね。先生、知的障がいのある生徒指導一筋、三十四年ですよ。ついに念願が叶いましたね」

「はい。でもここはまだ出発点なんです。いずれは都道府県の特別支援学校に硬式野球部を作り、それぞれの高等学校野球連盟に加盟して、大会参加しないとイケないので、これからですね」

「久保田先生から一度お話を伺いましたが、先生が本気で生徒たちと甲子園大会の予選を目指そうとしたときがあったのですよね」

「はい。そのときが今日の甲子園夢プロジェクトの原点だったと思います」

私は打撃練習に励む生徒たちを見ながら、往時に思いを馳せた。





甲子園夢プロジェクトの原点

目次

ブローグ ..... i

第一章 屈辱 ..... 1

野球歴 1

パニック障がい 11

挑発 24

やる気 37

葛藤 44

合宿 48

夜 59

変化 66

屈辱 73

遅刻と初登板 82

決断 92

あとがき

219

エピソード

214

四月	210
高校野球	200
予選	192
大会	173
大量退団	165
ブログ	152
愛情	137
補導	126
惨敗	122
心配	118
不安	108

第二章 希望

108